

横向きの石の神殿

国史跡の「石の宝殿」の魅力を広く知って頂くため
「横向きの石の神殿」の紙芝居を作りました。

すでに多くの皆さんに 面白く、楽しく見て頂いています。

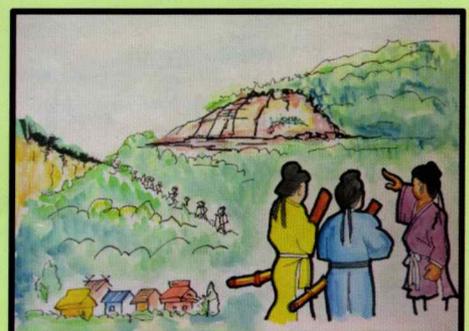
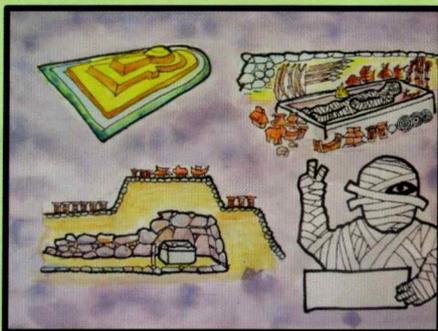
石の宝殿研究会



①おじいさんから
「石の宝殿がちゃんと立っとならこの辺は大きな都になつたかも知れん」とよく聞かされていました

②昔むかし 1700 年も前は山のふもと近くまで海でした山あり、川あり、森があつてこの辺りは大変豊かな土地でした

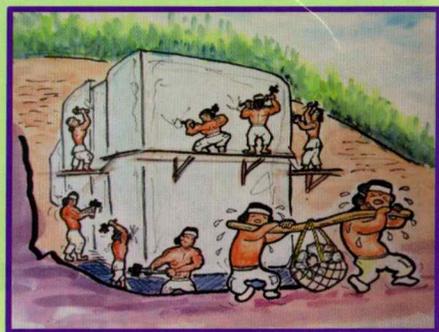
③そんな昔から山では沢山の石を切り出していました王様や地方の豪族のお墓の石棺を造り 竜山石として日本でも大変有名でした



④山口県から滋賀県にかけて約 500 個の石棺を造りました世界遺産になった大阪の仁徳天皇陵(大仙古墳)の石棺も竜山石で造られたようです

⑤各地のことが書かれた古いふるい書物「播磨国風土記」が見つかり これには物部の守屋の指示で大石が造られたと書かれていました

⑥守屋は遠くからでもよく見える 宝殿山の大きなコブ石で石の神殿をつくり国が豊かで病気も流行らない様お祀りしようと考えました



⑦石は上の方から彫り込んでいきます 昔の石工は岩の下がきれいに割れていることを知って横向きで造ってサイゴに立てることとしました

⑧表面もきれいに仕上げました ヨッコラシヨと立てることで 1.4 倍もの神殿が出来る予定でした 神殿の重さは約500 トンにもなります

⑨ちょうどそのころ中国から仏教が伝わってきました金びかの仏像を見てビックリすぐに仏様を祀ろうとする人たちが出てきました

10分間



石の宝殿「浮石」については誰が、いつ、何の為・・・と謎ばかりで 今までも約40名近くの学者の方々がいろいろな説を述べられています。その内のひとつを紹介しているものです。



⑩昔から神様を祀って来たので仏様なんか必要ないとする人とよその国で大切に祀られている仏様を祀ろうとする人の間で争いがはじまります



⑪そのころ全国でこわい病気が流行り多くの人が亡くなります 守屋は「それ見ろ仏様を祀ったせいだ」と 川に仏様を捨てたり寺を焼き払います



⑫ついに神様を祀る人と仏様を祀る人の間で戦いはじまります この時守屋が敵の矢を胸に受け亡くなります



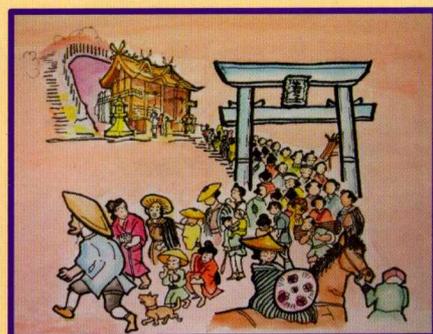
⑬守屋が亡くなったために神殿造りももう少しのところでやめることとなりました 村人は横になった石の神殿を大切に祀ることとしました



⑭それから 500 年後の平安時代の末に立派な拝殿が建てられます この地を治めていた平の清盛が建てたと思われ ます



⑮平の清盛は「京都の都は住みにくい 播磨の地に都を移そう」と考えていました 残念ながら源氏との戦が始まり都は出来ませんでした



⑯さらに 500 年後の江戸時代には庶民も旅行するようになります 商売が繁昌すると石の宝殿にお参りに来る人で大賑わいとなりました



⑰現在では8つの氏子村が大切に神社をお祀りしています 秋祭りには神輿や屋台がでて賑やかな祭りとなっています



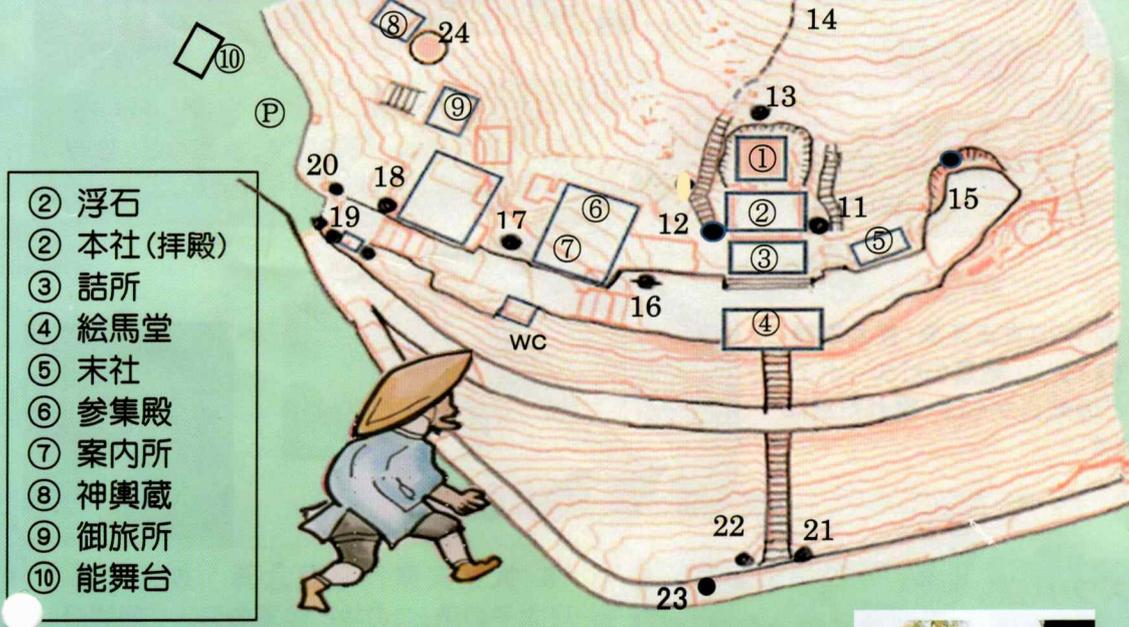
石の宝殿研究会は H29年7月発足、石の宝殿周辺遺跡の魅力の再発見に努め 出前講演や写真展、クイズラリーなど PR 活動を行っています。

発行者:石の宝殿研究会

080-4021-9095

発行日:令和2年(2020)9月30日

石の宝殿神社史跡めぐり



- ② 浮石
- ② 本社(拝殿)
- ③ 詰所
- ④ 絵馬堂
- ⑤ 末社
- ⑥ 参集殿
- ⑦ 案内所
- ⑧ 神輿蔵
- ⑨ 御旅所
- ⑩ 能舞台

- 11 霊岩
- 12 夜燈;石灯籠
- 13 玉垣
- 14 山頂
- 15 大ズワリ
- 16 記念碑
(大正天皇)
- 17 句碑
(島津の姫)
- 18 石灯籠 1
- 19 国史跡碑
- 20 三の鳥居
- 21 二の鳥居
- 22 石灯籠 2
- 23 家紋石
- 24 竜山1号墳

① 浮石 465トンもある巨大な石造物。播磨風土記に物部の守屋が造らせたと書かれていましたが、それ以外は全く謎につつまれた石。浮石の下は水平方向に割れており、東側に溝を深く彫り立てようとしていた様です。



★ご神体の浮石に直接触れることができます。しっかりパワーをもらってください。



② 本社(拝殿) 現在の本社は天保15年(1844)に棟上げ再建されたもの。右側に少毘古那を、左側に大穴牟遲の2神が祀られています。このような造りを「割り拝殿」といいます。



③ 詰所 階段の上の詰所は江戸時代の末期に建てられたものです。

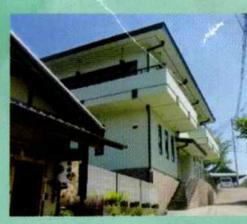
④ 絵馬堂 文化13年(1816)以降の建築。市指定文化財の算額のレプリカが掛かっており、本物は本社の中央の上にあります。備中井原の佐藤善一郎一門の算額は東播磨では、ここと稲美国安の天満神社の2つしかありません。



算額



⑤ 末社 H23に再建。生石神社は播磨巡覧図絵などによればもっと広く建物があった様です。



⑥ 参集殿 2階の参集殿は大広間があり、神社の諸行事・直会や講演・会議などにも使われています。

⑦ 案内所(浮石資料館) 一階に令和2年6月に開設され 市観光交流ビューローの管理のもと土日祝にオープンしています。

⑧ 神輿蔵と⑨ 御旅所 神社境内に御旅所があるため 神輿は秋祭りの宵宮に当番の村に運ばれ、翌朝村を回って 本宮の当日は本社、御旅所と練場の間を練りまわります。

⑩ 能舞台 H11年に移動、新築された。秋祭りにはお面掛けの神事が行われます。



石の宝殿研究会は H29年7月発足、石の宝殿周辺遺跡の魅力の再発見に努め 出前講演や写真展、クイズラリーなど PR 活動を行っています。
 発行者:石の宝殿研究会 080-4021-9095
 発行日:令和2年(2020) 6月30日



11 霊岩 下の面が座りキズで切れていることが明確で、これを根拠に浮石制作にかかったと推察される。パワースポットです。皆で押してみましょう。



12 夜燈・石灯笼

島村の石工さん達が精魂込めて造った灯笼です。一説には播磨灘を照らす灯台の役目も担っていたとも言われています。

13 玉垣

昭和4年に建てられ、日毛印南、多木肥料、稲岡工業、旅館など当時の有力企業の名前が見られます。

14 宝殿山山頂 明治42年の大正天皇(皇太子時代)行幸の記念碑がたっています。絶景のビューポイントです。山頂の北10mほどの地点からは晴れた日には山間に姫路城が見れます。



15 大ズワリ(座りキズ) 末社の北の方に行くと下の岩場と奥の岩壁が直角になっているところに出ます。岩が固まる時に出来る水平方向の割れで、浮石をつくる前の状況を垣間見ることが出来ます。

16 大正天皇行幸記念碑

明治42年皇太子の時、この地に陸軍の演習を観閲の目的で行幸された。山裾の二の鳥居から石段を登られ山頂まで行かれました。

17 姫様の句碑と腰掛岩 寛文の頃、島津の姫様が12歳(7歳?)の時に丸石に腰を掛けて和歌を詠まれた。「たまにきてまたこむことのかたければなごり生石の石の御社(みあくら)」



18 石灯笼

文政12年(1829)大阪世話人の他20数名により建造。石の販売関係者の名前が並びます。



19 国史跡碑とおんびき蛙 三の鳥居の下に国史跡碑とおんびき蛙が出迎えてくれます。採石場の棟梁が夢枕で「カエルを彫れば商売繁盛する」と神様のお告げがあったとか。



21 二の鳥居 「宝暦10年(1760)大阪心斎橋筋 菊屋」との名前があり当時の繁栄が偲べれます。

22 石灯笼2 寛延3年(1750)に古文書にも記載のある大阪の石問屋4軒が建てたもの。(井筒屋、堺屋、江戸屋、名田屋)



20 三の鳥居の石額 三の鳥居には「生石子神社」の石額が上がっている。播磨地誌「峯相記」にのみ見られ、隣の2基の灯笼にも同じ表記がある。

23 家紋石 もととは竜山の山腹にあったもの。採石により落下し2つに割れました。竜山石が姫路藩の専売品となったのを記念して島村の石工達が作ったものでは思われます。



昔の本社 昭和54年に本社の屋根は檜皮葺きから銅葺き屋根に改修、また参道の石段もコンクリート道に改修されました。



24 竜山1号墳 神奥蔵のすぐ後ろが1号墳で、石棺とその蓋がむき出しで見られます。採石場を纏めていた首長の墓とも言われていますが詳しくは不明です



長く急な石段をのぼり
本殿をくぐると

そこには驚くほど
巨大な石が鎮座している。

圧倒的なパワーと雰囲気
太古の昔、神々がここに降臨し

石の宮殿を造ろうと
したという伝説を

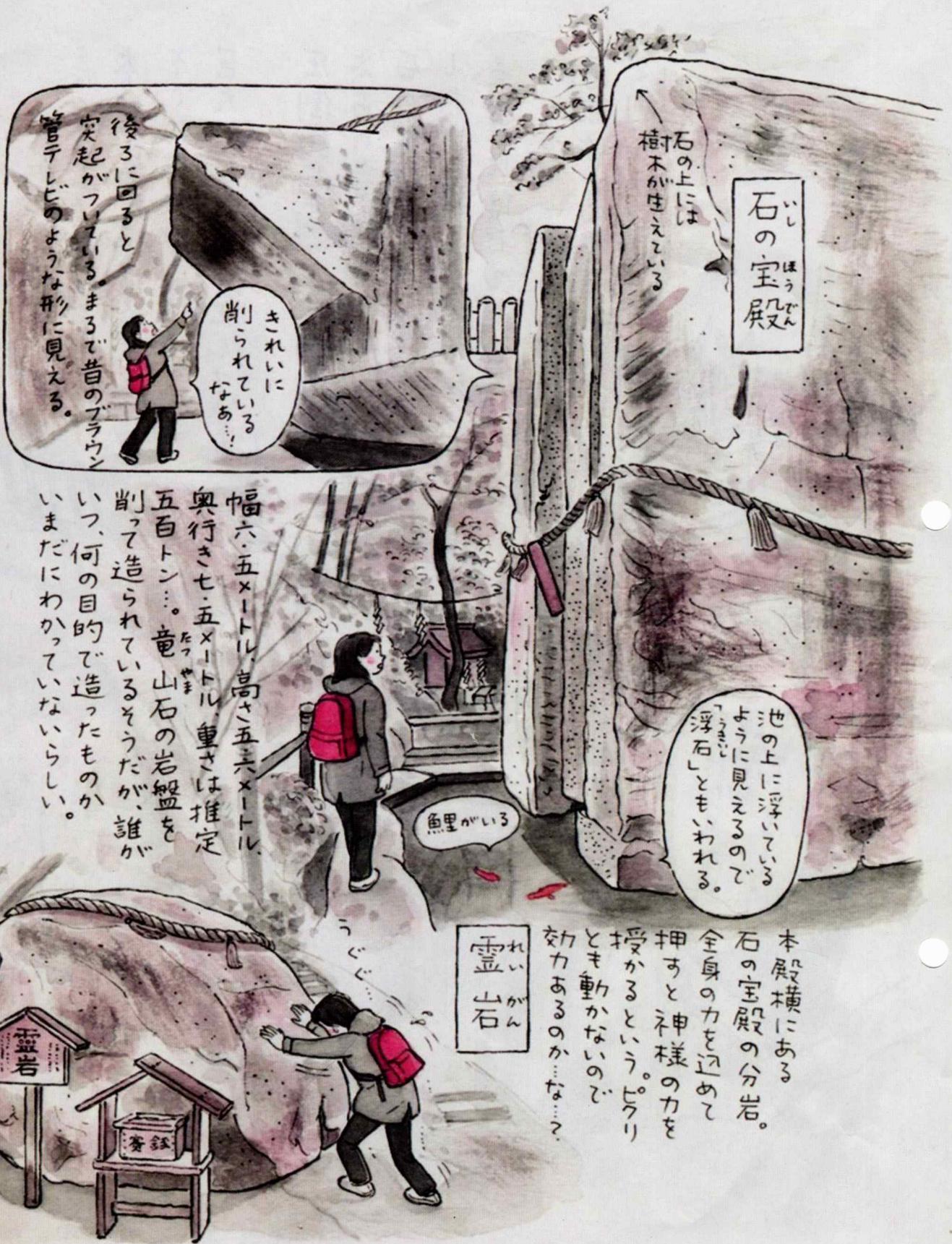
素直に信じてしまう。

厄除け、病気平癒などに
ご利益があるとされる。

言せまにならない。
次々疑問がわいてくるー！

特別編(石の宝殿) その1

この挿し絵はイラストレーター 川上真理子さんの好意で
地域の活性化のために、使用させていただきます。
著者 川上真理子 使用者 石の宝殿研究会



特別編(石の宝殿)その2

この挿し絵はイラストレーター 川上真理子さんの好意で
地域の活性化のために、使用させていただきます。

著者 川上真理子 使用者 石の宝殿研究会

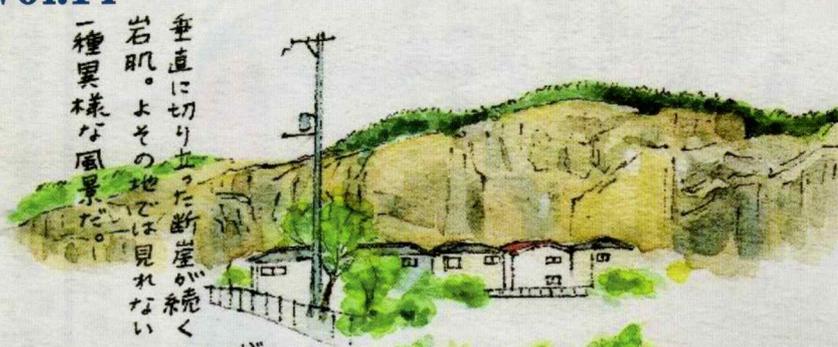
川上真理子の近くの町で小さな旅

高砂市阿弥陀町・生石神社

Vol.14



新緑が目にもまぶしい町歩きにぴったりのシーズン到来ですね！今回は「日本三奇」といわれるパワースポット石の宝殿へ！自然に囲まれた高砂の北西部に位置する生石神社にあります。



垂直に切り立った断崖が続く岩肌。よその地では見れない一種異様な風景だ。



「こわー、ほんまに石が浮いてる！」（みたいに見える）

巨大すぎて一枚の写真に収まりきれない……



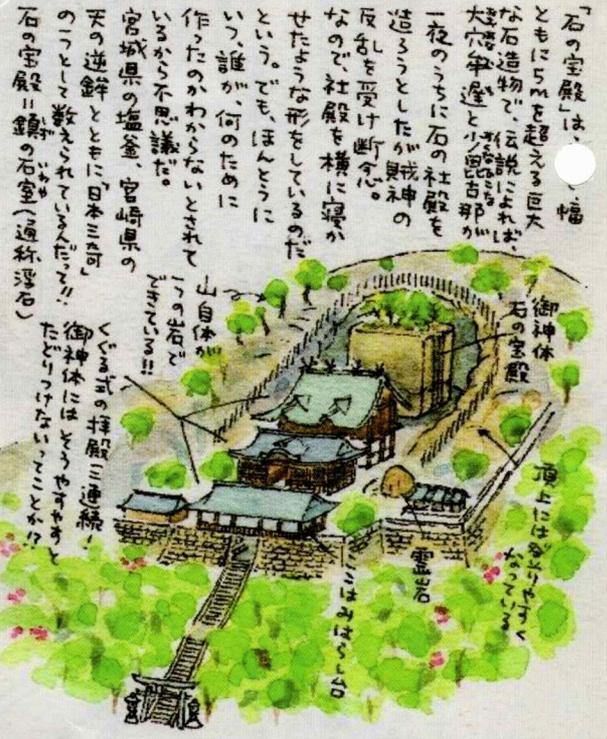
石の周りをくまなくまわることができるといいですね。

池の水に浮いたように見えませんか？「石の浮き」は、水が石の隙間に浸透し、石の表面を濡らすことで起こります。

私事ですが、なせかここを訪れたからか、元気がなくなり、ツイてるような気がする……。やはり石に近づいた瞬間、かような感じがするのかもしれない。



ちょっとしたベンチに訪れるのもいいかな。穴場的スポットだと思いませんか？



「石の宝殿」は、幅とも5mを超える巨大な石造物で、伝説によれば、穴太半造と少僧侶が一夜のうちに石の社殿を造ったとされた。石の宝殿の反響を受け断念したので、社殿を横に寝かせたような形をしているのだという。でも、ほんとうに作ったのかかわからないとされているから不思議だ。

宮城県塩釜市、宮崎県天の逆針ととも「日本三奇」の一つとして数えられている。石の宝殿は、鏡の石室（通称浮石）の宝殿、鐘の石室（通称浮石）の宝殿、御神体、石の宝殿、頂上には多岐川が流れている。



この挿し絵はイラストレーター 川上真理子さんの好意で地域の活性化のために、使用させていただきます。著者 川上真理子 使用者 石の宝殿研究会

高砂市伊保町界隈



かつて多くの文化人が来遊した水の町伊保。

願わくば

彼らの愛でた桜を

あの頃の伊保の町で見てみたい！

歴史に触れるたび

失ったものの重みを感じる

今日この頃です。

観涛慶

加茂山の山腹にある高砂六五ノ丁、幅五ノ丁の巨岩に刻まれた「観涛処」の文字を刻んだ石碑。永根文峰が書いたものを当時の姫路藩家老・河合寸翁が刻ませたものだそう。よく晴れた日には淡路島から家島群島まで一望の下見渡せ。海岸には松の緑、青い海には真帆白帆が怪しい。一幅の名画を見るか如く情趣あふれたものだった。現在の景色を見ながらにし文の伊保の美しい景色を想像してみよう！

眺めがいいよー

加茂神社は住吉街を抜けたところにあるよ！

江戸時代に私財を投げ打って地元百姓を救った偉大な金時宗五郎と中村五郎右衛門の墓が、この町にあり、水が流れる町に静かに佇んでいる。

金時宗五郎の墓



イカサのくまを煮るに、あじはりに！

昔、高砂の名門豪家は多くの文人・墨客・武士、俳人などの来遊を歓迎していた。この地は一大文化都市のよすがであった。その来遊者の中には有名学者も多かった。その一人が仁科白谷。備前生まれで、高砂でせきとなった学者。仁科白谷の墓がある。



珍らしい、見物。野菜かある。鉄眼板大蔵経も有名。

今まじ各地の「ふあしん」へ行ったり、やばい土地柄があつておもしろい。決めるかまほ。午作りのかまほ。天からかおし。きき煮や穴子。味付けのりな。ものまである！

梅井という珍しい地名は荒井村の左衛門が塩田を開拓し、村をつくらせた。最初は荒井新村とよんだ。その後、魚崎新村となり、この地に菅公ゆかりの清水が湧くこと、明治9年、梅井と改めた。

今では全くなごりもないが、塩業はこの辺りの主な産業だった。

伊保港



アカミツの鮎炊き

9日-5日 祝日休む

高砂市役所

高砂市役所

この挿し絵はイラストレーター 川上真理子さんの好意で地域の活性化のために、使用させていただきます。著者 川上真理子 使用者 石の宝殿研究会